

太田東西かわら版

おんころころせんだりまとうぎそわか

2021.9

お母さん、 ありがとう！



今から4年前の2017年4月。〈太田東西薬局20周年記念祭〉のラスト。ご参加いただいた皆様に向かって、家族全員でお辞儀をして御礼を述べました。その後、妻の母（幸子さん）に私は御礼を述べました。

「今の太田東西薬局があるのは、薬局が20周年を迎えることができたのはお母さん、あなたのおかげです。ありがとう！」と。

今の薬局があるのは、もちろんお客様のおかげだと心から感謝していますが同時に妻のおかげだと思っています。

振り返って思うことは、達成感の喜びよりも、期待に応えられなかったという挫折感のほうが多かった。この仕事を辞めたいと、何度も思って来ました。

でも私がその都度、再びやる気を起こせたのは妻のおかげです。共感も批判もすることなく、ただただ“普通”に接してくれていました。イケイケ系ではなく、いわゆる“癒し系”の妻（今も？）😄。

そんな妻を生んでくれたのが幸子さんであり、同じく“癒し系”の上品なお母さんでした。結婚も快諾してくれて、婿の私を全肯定してくれました。

その“全肯定”の最初は、結婚前の初対面時。初めて妻の家に遊びに行った32年前でした。

緊張していた私をほぐしてくれたのは、幸子さんでした。

自宅の2階の窓から、満面の笑みで「こっちよ～～」(^o^)/私に手を振って歓迎してくれたのでした。

右写真は7月、病に伏す幸子さんを励ましに出向いて、当時を思い出して撮ったものです。



「この窓から手を振って、温かく自分を迎えてくれたんだっただなあ～」そう改めて実感し、必ず病を治してあげると誓ったのでした。

太田東西薬局を開業したのは31歳の時。24歳で結婚してから7年間は妻の実家の近くに住み、幸子さんにはたくさん応援してもらいました。

ある時、妻とケンカになりました。通常、妻が「実家に帰らせていただきます」なるところ、婿の私が妻の実家に家出してビールをごちそうになりました。(^-^);

東京から長崎にUターンしてからは、ほぼ毎年長崎に顔を出してくれました。



「息子の嫁はなっていない!」「娘の婿はまったく甲斐性がない!」
子どもの結婚相手に文句・愚痴を言う人たちも見聞しますが・・・
子ども家族の幸せを願うなら、初対面の時から温かく迎えることです。

「自分は相手の親に嫌われている」。そんなネガティブな第一印象を抱かせては、先々うまくいかないものです。
いわゆる“嫁姑”問題も、初対面からどこか相手を批判的に疑って見てしまう。
そんな排他的思考が双方にあることが原因だったりします。

東京で仕事がある度に、幸子さんには声をかけていっしょに食事しました。長崎では手打ち蕎麦はじめ、手作りピザも作ってあげました。冬には大好物のアワビもご馳走しました。たくさん旅行にも連れて行きました。



なぜなら、婿の私を初対面の時からずっと認めてくれたから。応援してくれたから。

幸子さんと最後の会食になった昨年(2020年)の7月。東京にいる息子らも一緒でした。コロナでなかなかお店が見つかりませんでした。幸子さんを喜ばせたい一心でなんとか探し出し、アワビもご馳走できました。

私にとって幸子さんとの会食は、不要不急の外出ではなく“重要急用”です。振り返って思います。あの時あって、ほんとうによかったと。



2021年8月30日。
長谷川幸子、永眠しました。享年84歳。

薬剤師として病を治してあげられなかったことは痛恨の極みですが、一方で病院ではなく在宅医療を選択した判断には満足しています。
家族に見守られて、手をしっかり握られて、苦しみも痛みもなく、穏やかに旅立てたから。

隔離・面会謝絶という「孤独」を感じさせることなく、住み慣れた自宅で家族といっしょに残された時間を「安心」して過ごせたから。

幸子さんとの最後のお別れ。薬剤師から看取り士となって。
いや、「婿」として。
ドライアイスで冷たくなった顔に、自分の手を熱くなるまで擦り合わせ感謝の想いととも両手を置きました。



9月1日。
帰り道、初対面の
思い出のあの場所に立って

「お母さん、ありがとう！」

合掌してお別れしました。

